

# 異文化における心理的サポートについての理論的考察

—新たなパラダイムの提案—

植 松 晃 子\*

## A theoretical consideration of mental support in cross-cultural situation

: new suggestion for the paradigms of identity

UEMATSU Akiko

### abstract

The purpose of this paper is to review the theory of identity as the factor of mental health for Japanese abroad and to propose new suggestion for the paradigm of identity. The theory of identity was suggested by Erikson E.H. He said the identity was a concept, which contains a mutual complementation of “ego identity” and “group identity”. This relationship between those identities would be an important paradigm used in the frame of reference for one’s identity in another country. According to this paradigm, psychological symptoms (e.g., “up-rootedness”) caused by culture-shock would be the phenomenon of weakened “group identity” that supports a sense of “ego identity”. Previous studies focused on minority adolescents suggest that ethnic identity might be one of the important “group identity” in cross-cultural situation, and some Japanese cases showed one’s confusing ethnic identity caused psychological problems. A large number of Japanese abroad might be more conscious about their own ethnicity than before they leave Japan. Also, a longitudinal study about Japanese student abroad revealed it. Therefore, ethnic identity could have a significant role of transcultural mental health approach for Japanese abroad. Further researches are needed to examine this paradigm, and to explore the relationship between ethnic identity and “ego identity” more clearly.

Keywords : cross-cultural situation, mental health, Japanese abroad, identity theory, ethnic identity

### 1. 問題と目的

2006年度、増加を続けていた海外在留邦人数は106万人を越えた（外務大臣領事局政策課編，2007）。長期短期を問わず海外渡航が身近なものになった反面、日本は島国であり、国内の日本人の多くは比較的安定した文化的・民族的な構造の中でマジョリティとして存在しているため、滞在国の文化に適応しにくく不適応を感じやすいとされる（中根，1972；上田，1977；近藤，1981）。また11年に渡る海外邦人を対象とした精神科臨床の累計結果によると、受診の背景には既往歴（22.4%）や渡航前の悩み・トラブル（20.3%）があるものの、約半数（56.4%）は渡航前に問題が見られていない（鈴木・立見・大田，1997）。この結果は、海外渡航自体が持っている心理面へ

---

キーワード：異文化環境、メンタルヘルス、海外滞在邦人、アイデンティティ理論、民族アイデンティティ

\*平成11年度生 人間発達科学専攻

のリスクを示していると思われる。また鈴木ら（1997）は、現在の精神科受診数はおそらく実勢の3分の1程度であり、窓口があれば必ず増加すると指摘している。

こうした海外渡航者の問題を受け、最近では異文化間カウンセリングの必要性や（白土，2004）、多文化間メンタルヘルス（transcultural mental health）の必要性が指摘されるなど（阿部，2001）、異文化で生活する人々の心理的サポートに注目が集まっている。このような点から、異文化における心理的リスクが、どの部分に、どのように起こりやすいかを理論的に考察しておくことは、今後の渡航者援助ために有意義であると考えた。

異文化における心理的不適応について、山本（1984）はバイカルチュラルな生育歴を持つ青年が社会で自分の存在が根付くところを求めて迷走した例から、異文化での心理的介入の鍵概念としてアイデンティティの問題があると指摘している。また栗原（2004）は、学校カウンセラーとして、700人以上の帰国子女と外国人生徒、また国際結婚をした両親の子ども達との面接を行い、異文化接触が否応なしにアイデンティティを意識させられる状況であると指摘している。このような点から、海外に滞在する人々への心理的支援を考える際、異文化におけるアイデンティティのあり方を検討することは重要なポイントになると思われる。

よって本稿では、はじめにアイデンティティ概念を見直し、異文化でのアイデンティティを捉える際のパラダイムを提案する。また、そのパラダイムから異文化でのリスクがどのように起こり得るかを理論的に考察し、異文化での心理的サポートの要因を明らかにしたい。

## 2. なぜ異文化でアイデンティティが問題になるのか？

多くの場合アイデンティティの問題は、自分の存在を確認する必要に迫られる場面で重要となる（黒木，1996）。ではそもそも、異文化においてなぜアイデンティティが問題となるのだろうか。それを理解するために、まずアイデンティティという概念の成り立ちを考察する。

### （1）アイデンティティ概念再考

アイデンティティ（identity）という心理的概念を提案したErikson, E. H.は精神分析の訓練を受けたセラピストであり、概念を導いた理論的背景には自我心理学がある。そのためFreud, S.が構造論（topography）において提唱した心的装置（psychic apparatus）のうち、特に自我に焦点を当て、個人の精神内の秩序を維持しようとする適応的な力を積極的に捉えようとしている。そしてFreud, S.の心理性的な（psycho-sexual）心の発達理論を、社会・文化・時代と関わりながら発展していく心理社会的な（psycho-social）発達理論として発展させた（e.g., 個体発達分化図式（epigenetic chart））（Erikson, 1968）。アイデンティティの概念は、この自我機能にもとづいており、Eriksonの理論で中心的なものとなっている。

ではアイデンティティはいかに構成されるのだろうか。Erikson（1959）は、いわゆる規範としての超自我は、個人が生まれた社会がもつ文化や歴史、理想など、ある集団が経験を組織化する枠組み（やり方）からなる「集団アイデンティティ（group identity）」を内包するものとし、それは嫉などを通して自我に組織化されるとした（Erikson, 1959, p.20）。「集団アイデンティティ」の働きによって、人は自分自身を社会的現実の中で適応的に運営していくことができるようになり、所属する集団における一成功例としての自分を感じ、またその集団の社会的現実の中で定義されている方向に成長しつつあるという生き生きとした現実感を伴う確信を持つことになる。そしてこのような自我による主体性の感覚が、特に「自我アイデンティティ（ego identity）」と定められた（Erikson, 1959, p.22）。つまり「自我アイデンティティ」というのは、自我が「集団アイデンティティ」と相補的に満たしあう関係から生まれる、斉一性（sameness）や連続性（continuity）を持った自分についての、主体的で現実的な自覚といえる。「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」は相互関係を持っており、本来Eriksonのアイデンティティ概念は、社会集団における枠組みに支えられる感覚（「集団アイデンティティ」）と自我の統合感覚（「自我アイデンティティ」）との相互補完作用（mutual complementation）を内包しているのである。平たく言えば、個人は精神内に内なる社会と、それと相互に関係しあう内なる個を持つのであり、Eriksonのアイデンティティ理論は、この点を精神内の秩序を保とうとする自我の機能を反映した「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」という概念を用いて、システマティックに示していると言える。

Figure1では、このアイデンティティ概念の図示を試みた。様々な社会的現実が「集団アイデンティティ」を経て取り入れられ、「自我アイデンティティ」との相補的な関係をもって心理的に機能していることを示している。

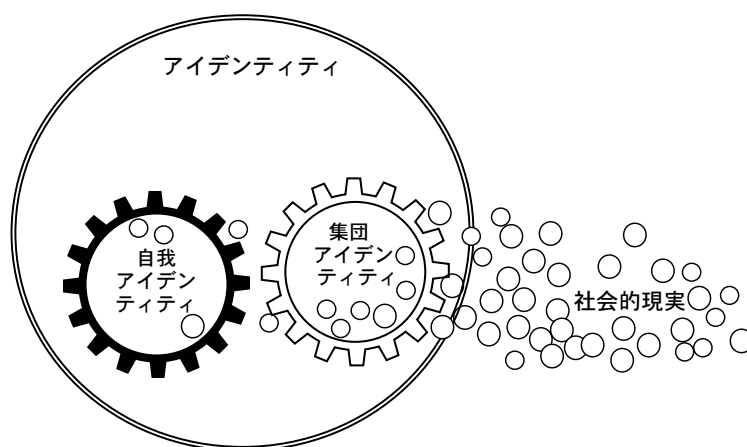


Figure 1 アイデンティティ概念の成り立ち

## (2) 「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関係パラダイムの提案

現在までに、この「自我アイデンティティ」と「集団アイデンティティ」の相補性はあまり積極的に論じられなくなった。そもそもアイデンティティ概念は、傷病兵の心理臨床的援助の場面で「自分が何者であるかわからない」といった明らかに斉一性や連続性、社会的役割を持っている確信などを喪失したアイデンティティ混乱の症例から発見したものである (Erikson, 1968)。しかし発達心理学において発達課題として理論化が進んだ際に、主な対象は臨床例から一般の人々に移った。そして次第に臨床例の理解に有効な概念であった、自我機能にもとづく力動的な定義は、この分野の主たるテーマから離れていったのだと思われる。

だが異文化でのアイデンティティのあり方を検討する場合には、バイカルチュラルな生育歴を持つ青年が社会の中で自分の依拠するところを求めた例のように (山本, 1984)、社会と個の関係を考える必要が出てくる。その際、個人が生活する場の社会集団を内包する「集団アイデンティティ」と自分の主体的感覚と現実感からなる「自我アイデンティティ」の相補的な関係をパラダイムの一つとして、再び注目することは有効な視点になるのではないだろうか。少なくともこのパラダイムは、複雑な概念であるアイデンティティの問題を「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関係から組織化することができる。メカニズムが明確になることによって、異文化におけるアイデンティティの問題にはどのようなアプローチが有効かといった視点の検討、およびバイカルチュラルな環境で生活する思春期・青年期のアイデンティティ発達を支援する際の要因やアプローチについて、今よりも明確に検討することが可能になるのではないだろうか。

もちろん発達心理学におけるこれまでのアイデンティティ研究は、アイデンティティを形成する要因として文脈 (context) の重要性を指摘している (Phinney & Goossens, 1996)。特にアイデンティティやパーソナリティの発達プロセスを検討した先行研究では、同じ言葉によって論じられていなくても、Eriksonの重視した個人が生活する社会との関わりや (e.g., 杉村, 1998: 対人的文脈とアイデンティティ形成の関係; 宗田・岡本, 2005: 個と関係性によるアイデンティティ形成)、自他の関係のなかで内的秩序を調整しようとする自我機能の特徴を表す発達プロセスが検討されてきている (e.g., 山本, 1988: 自我の一体性・分離性; 伊藤, 1993: 人格の発達における個人志向性・社会志向性)。

例えば杉村 (1998) は、身近な他者との関係性をアイデンティティ形成の文脈として重視した。ここでアイデンティティ形成プロセスは“自分の視点に気付き、他者の視点を内在化しながら、そこで生じる自己と他者の間の視点の食い違いを相互調節によって解決する作業 (杉村, 1998, p. 49)”と定義された。ここでいう“他者の視点”とは、もともとは青年が内在化する“他者と共有され得る考え方、欲求、意見、生き方など (杉村, 1998, p.49)”とされており、この他者との関係性によるアイデンティティ形成プロセスの観点を「集団アイデンティティ」と

「自我アイデンティティ」の関係から整理するならば、「集団アイデンティティ」の概念と重なる点と言える。そして“視点の食い違いを相互調節によって解決する作業”とは自分の内的な秩序を維持しようとする自我の調整機能について説明しており、そこで獲得されるアイデンティティとは「集団アイデンティティ」と関係している「自我アイデンティティ」の感覚に置き換えることが可能である。

本稿が提案する「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関係パラダイムは、心理的機能としての自我の働きを軸に、こうした発達心理学研究の成果を心理臨床的なテーマと共有のものとして、検討している点でも有効な視点であると思われる。

### (3) 異文化におけるアイデンティティの問題

この「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関係パラダイムから考えると、異文化接触がアイデンティティの問題を焦点化し、安定したアイデンティティにとって時にリスクとなり得るのは、個人が生きている社会的現実（国家、文化、民族のようなマキシマムなものから、仲間や家族集団などミニマムなものを含む）を反映する「集団アイデンティティ」という「自我アイデンティティ」の感覚に欠かせない準拠軸が揺らぐからだと考えられる。

Erikson (1964) は“根こぎ感 (up-rootedness)”と名付けているが、社会から切り離され、自分の「根」を失うと自我機能や「自我アイデンティティ」の感覚を弱め、抛り所の無い不安感を引き起こす可能性があり、ひどい場合には精神疾患につながる可能性もある。海外在住の日本人でもこの問題は指摘されている。例えば、海外移住を契機として、母国とその文化を失うことへの根こぎ感が生じ、アイデンティティが混乱したことから精神的危機を招いた日本人女性の事例がある（江畑，1982）。また両親が国際結婚をした15歳の日本人女性の事例研究において、母親の母国であるロシアと生活の場である日本における「集団アイデンティティ」の葛藤があり、その葛藤によって「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」との関係がかみ合わないことが、症状の原因として考察されている（延島，1963）。

多くの日本人にとって、異文化体験はバイカルチュラルな状況を生じさせるものであり、そのために「集団アイデンティティ」の葛藤や混乱といった揺らぎが体験される可能性がある。よって異文化での心理的サポートを考える際、この「集団アイデンティティ」のあり方は一つの手がかりになると思われる。

## 3. 異文化において重要な「集団アイデンティティ」とは？

では異文化経験の中で、重要になる「集団アイデンティティ」とはどのようなものだろうか。先の2つの事例では民族アイデンティティ（江畑，1982）や、国民アイデンティティ（延島，1963）が注目されている。複数の文化・民族圏で生活する際、このように文化や民族に関わる「集団アイデンティティ」が重要である（Phinney, 1990; 井上, 1993）。代表的なものとして、本稿では民族アイデンティティを取り上げ、主に発達心理学研究においてマイノリティ青年のアイデンティティ発達に関して研究されてきた民族アイデンティティについてレビューし、異文化における心理的サポート要因の検討を行う。

### (1) マイノリティ青年の民族アイデンティティ研究

民族アイデンティティはマイノリティ青年にとって重要なアイデンティティの一側面であるとされる。特に1960年代の公民権運動の広がりとともにマイノリティの民族性の問題に焦点が当てられるようになり、民族アイデンティティ研究が盛んになった（鑪・山本・宮下，1984）。

よって初期の民族アイデンティティ研究は、African-Americanなど特定の民族集団を対象に、その性質や（e.g., Dizard, 1970; Rice, Rize, & Padilla, 1974）、構成要因を明らかにしようとするもの（e.g., Bourhis, Ciles, & Tajfel, 1973; Taylor, Bassili & Aboud, 1973）、また自分の民族性を心理的に内在化する過程としての発達（e.g., Cross, 1971, 1978; Mollion, 1980）に焦点が当たっていた。その後Phinney（1989, 1990, 1992）の一連の研究によって、民族の枠を越えた普遍的な発達モデルが検討されると、民族アイデンティティ研究はさらに発展した。

Phinney (1992) では Marcia (1966) によるアイデンティティ・ステイタス研究の基準を応用して (1) 自分の民族性の「探索 (exploration)」と (2) 自分の民族性への「愛着・所属感 (affirmation/belonging)」(後にコミットメント (commitment; Phinney & Ong, 2007) が、様々な民族に共通の民族アイデンティティ発達の構成要因として整理されている。Marcia (1966) のアイデンティティ拡散 (diffusion) と早期完了 (foreclosure) の段階として「民族アイデンティティ無検討 (unexamined ethnic identity)」があり、ここでは自分の民族性への関心は低く、探索はなされていない。そしてアイデンティティ・クライシスを経たモラトリアム (moratorium) の段階として「民族アイデンティティ検索 (ethnic identity search)」があり、ここでは自分の民族性を意識し始め、その意味を理解しようとする探索に関与する。そして最終段階のアイデンティティ獲得 (achievement) として「民族アイデンティティ獲得 (achieved ethnic identity)」があり、自分の民族性に対する明快で確信を持った感覚を得るとされる。Phinney (1992) はこのモデルに基づいて多民族アイデンティティ尺度 (Multigroup Ethnic Identity Measure; MEIM) を作成し、以降この尺度による調査が広く行われるようになった。

## (2) 関係パラダイムによる民族アイデンティティ研究の整理

MEIMを用いた研究では、マイノリティ青年の民族アイデンティティの得点は、マジョリティ青年と比べて有意に高いことが明らかになっている (Phinney, 1992; Roberts, Phinney, Masse, Chen, Roberts, & Romero, 1999; Weisskrich, 2005)。これらの結果は、マイノリティ青年において民族性に関する「集団アイデンティティ」がより明確に意識されていることを示し、それが彼らにとって重要な側面であることを示唆する。

はじめ、社会的マイノリティの青年は、アイデンティティ発達に困難があるとされていた (Chethik, Fleming, Mayer, & McCoy, 1967; Erikson, 1968)。彼らは否定的なステレオタイプによって虐げられた社会集団の一員として生きる中で、青年期の心理的発達において健康的な「集団アイデンティティ」を機能させ、それと関連する心理社会的な「自我アイデンティティ」の感覚を獲得することが難しかったと思われる。しかしその後、より健全な「集団アイデンティティ」の基盤としてユニークな民族集団のあり方に関連した民族アイデンティティに焦点が当たるようになった。そして多くの African-American の研究から、肯定的な民族アイデンティティを持てることは、彼らが社会で適応的になり、より肯定的な自己概念の形成を可能にすると分かってきた (山本, 1995)。

また、MEIMを用いた Yasui, Dorham, Dishion (2004) の研究では、彼らの民族アイデンティティは精神的健康や学校環境への適応の程度と関連していることが明らかになっている。他の MEIM を用いた研究でも、彼らの民族アイデンティティは適応感や自尊心、抑うつ感などとの関連が明らかになっている (e.g., Yip & Fuligni, 2002; Lee & Yoo, 2004; Ong, Phinney, & Denis, 2006)。

適応感、自尊心や抑うつ感は、心理社会的な現実感覚としての「自我アイデンティティ」に関連する要因でもあるため、これらの結果は本稿の「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関係パラダイムに矛盾せず、またマイノリティ青年にとっては、民族アイデンティティが「自我アイデンティティ」のあり方とポジティブに関連する重要な「集団アイデンティティ」の側面であることを示唆する。

民族アイデンティティと「自我アイデンティティ」との関連を直接見た研究は少ないが、Phinney (1989) は民族アイデンティティ・ステイタスによって、自我アイデンティティの得点に差が見られるかを検討している。結果、民族アイデンティティ・ステイタスが高い「民族アイデンティティ獲得」群は、もっとも「自我アイデンティティ」得点が高いことが明らかになった。この研究は、民族アイデンティティと「自我アイデンティティ」を直接に論じたものではないが、ステイタスの基準となる民族性に対する積極的な関心や、明確な所属感及び肯定的な感情を持っていることは、より明確で安定した「自我アイデンティティ」の状態に関連していることが示された。つまり「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関係パラダイムから考えるならば、マイノリティ青年の民族アイデンティティは「自我アイデンティティ」の安定や明確さに関連する要因であると考えられる。

多くの日本人は、異文化においてバイカルチュラルな体験をするだけでなく、マジョリティからマイノリティへの属性移行を体験する。よって「集団アイデンティティ」のうち、民族アイデンティティのあり方を考えるこ

とは、彼らの異文化での心理的サポートを検討する際に重要な視点であると考えられる。

### (3) 日本人の異文化体験と民族アイデンティティ

日本人の民族アイデンティティ研究は少ないが、民族アイデンティティの構成要因 (Phinney, 1990) を用いて推察すると、日本国内では先行研究における多民族社会のマジョリティ青年と同じように、自分の民族性への関心が低く (1) 探索も (2) 愛着・所属感も低い群の特徴を持っている可能性がある。つまり国内での民族アイデンティティは「自我アイデンティティ」にとって重要な「集団アイデンティティ」の一領域にはなっておらず、日常的に意識する場面も少ないのではないだろうか。

しかし多くの日本人の場合、異文化体験は文化的移行だけでなく、マジョリティからマイノリティへの属性移行を伴っている。これらの移行は自分の民族・文化的背景に関連する「集団アイデンティティ」への焦点化を促すことになるだろう。すなわち国内では沈潜していた民族アイデンティティが先行研究のマイノリティ青年と同じように顕在化する可能性がある。そして異文化での体験の中で、自分の民族性を基盤にした民族アイデンティティが「自我アイデンティティ」に関連する「集団アイデンティティ」として機能し始めるのではないだろうか。

日本人の交換留学生を対象とした縦断調査で、留学前と留学後のインタビューデータを、Phinney (1990) の民族アイデンティティの構成要因 (「探索経験」と「愛着・所属感」) を基準に評定したところ、留学後にいずれの基準も高いものが多くなることが明らかになった (植松, 2008)。後の分析では、評定値の有意差も判明した。この結果は、異文化における民族アイデンティティの顕在化を示しており、日本人青年の「集団アイデンティティ」として民族アイデンティティを検討することの妥当性を示唆している。「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関係パラダイムからは、異文化における民族アイデンティティと「自我アイデンティティ」がどのように関連しているか明らかにできれば、今後、異文化で臨床的な介入が必要なアイデンティティの問題が生じた場合、もしくはアイデンティティ発達の援助の際に、有益なものになると思われる。

先の、Phinney (1989) の民族アイデンティティ・ステータスと自我アイデンティティ得点の関連は興味深い結果を示しているのだが、用いた自我アイデンティティ尺度は自我の発達分化モデルにもとづいて開発された尺度 (Erikson Psychosocial Inventory Scale: EPSI ; Rosenthal, Gurney, & Moor, 1981) の一部を弁別性や信頼性を検討せずに用いているといった手法的な問題がある。よってこのような点を改善して、再度検討する必要があるだろう。さらにこの研究では民族アイデンティティ・ステータスと「自我アイデンティティ」の状態の関連を見ているが、異文化における心理的サポートの要因として民族アイデンティティを検討するためには、民族アイデンティティのステータスで明らかになる側面だけでなく、民族アイデンティティが「自我アイデンティティ」にどのような働きをしているのかを明らかにする必要がある。よって、例えば民族アイデンティティの構成要因を用いた検討を行うことや、インタビューなどのプロトコルデータから異文化環境で民族性が意識される場面の心理状態について検討することが必要になるだろう。

## 4. まとめ—心理的サポートについての考察と今後の課題—

本稿では、今後増加すると思われる異文化でのアイデンティティのあり方を検討する場合に「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の相補性という関係を、一つのパラダイムとして再び注目することが重要であることを理論的に考察してきた。また、異文化では「集団アイデンティティ」の揺らぎが体験される可能性があることから、「集団アイデンティティ」のうち民族アイデンティティの側面に着目した研究を概観し、「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関係パラダイムから、民族アイデンティティのあり方を検討することが異文化での心理的サポートの要因を明らかにするために有効な視点であると提案した。

### (1) 心理的サポートについての考察

理論的考察からは、異文化における心理的サポートの方向性について、まず個人の「集団アイデンティティ」の状態を査定し、異文化に移行したことで失ったもの、そこで必要としているものを明らかにすることが有効であると考えられる。そこに「集団アイデンティティ」の葛藤や混乱などの揺らぎが見られる場合には心理面接の

中で整理し、より明確なものにしていくアプローチが求められ、それが「自我アイデンティティ」の安定に効果的であると考えられる。

本稿では特に異文化における「集団アイデンティティ」として民族アイデンティティに注目した。「集団アイデンティティ」は自分が重要だと思ふ様々な集団、および発達位相を含むものであるため個人差が考えられるが、マイノリティ青年の研究レビューからは異文化での民族アイデンティティの重要性が推察され、また日本人留学生を対象とした調査では異文化で日本人青年の民族アイデンティティが顕在化する可能性が示された。よって異文化での心理的サポートの中で、自分の民族性について扱い、民族アイデンティティに注目することは意味のある介入になる可能性がある。

## (2) 今後の課題

本稿で提案した「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関係パラダイムは、日本人の民族アイデンティティが、異文化で「自我アイデンティティ」に関連する「集団アイデンティティ」となるのかを含め、実際のデータによって妥当性の検証を重ねていくことが課題となる。例えばこの関係パラダイムを基盤にした仮説モデルを検証することやインタビュー調査による質的な側面からの検証が必要である。アイデンティティの概念は、人が生きる上で重要な要素をたぶんに含んでおり、定義を明確にしながら、今後様々な角度から検証を積み重ねていくことが求められる。

## 引用文献

- 阿部祐 (2001) 多文化間メンタルヘルスの動向と実践。順天堂大学スポーツ健康科学研究, 5, 1-7.
- Bourhis, Y., Giles, H., & Tajfel, H. (1973). Language as a determinant of Welsh identity. *European Journal of Social Psychology*, 3, 447-460.
- Chethik, M., Fleming, E., Mayer, F., & McCoy, N. (1967). A quest for identity: Treatment of disturbed Negro children in a predominantly white treatment center. *American Journal of Orthopsychiatry*, 37, 71-77.
- Cross, W. (1971). The Negro-to-Black conversion experience: Towards a psychology of Black Liberation. *Black World*, 20, 13-27.
- Cross, W. (1978). The Thomas and Cross models of psychological nigrescence: A literature review. *Journal of Black Psychology*, 4, 13-31.
- Dizrd, E. (1970). Black identity, social class, and black power. *Psychiatry*, 33, 195-207.
- 江畑敬介 (1982) 日系移民分裂病者の発病過程と病状変遷—民族同一性の視点から—。季刊精神療法, 8, 53-60.
- Erikson, E. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.
- Erikson, E. (1959). *Identity and the Life Cycle*. New York: Norton.
- Erikson (1964). *Insight and responsibility*. New York: Norton.
- Erikson, E. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. New York: Norton.
- Henderson, S. & Byrne, D. C. (1977). Towards a method for assessing social support systems. *Mental Health and Society*, 4, 164-170.
- 伊藤美奈子 (1993) 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究。教育心理学研究, 41, 2943-301.
- 井上果子 (1993) 複数文化を体験した青年の多重アイデンティティ—少数民族の“共有された否認(shared denial)”について—。精神分析研究, 37, 85-95.
- 外務省領事局政策課 (2007) 海外在留邦人数調査統計 平成19年最新版。国立印刷局
- 近藤裕 (1981) カルチャー・ショックの心理：異文化と付き合うために。大阪：創元社。
- 栗原真弓 (2004) 異文化間カウンセリングを実施するうえでの留意点—帰国児童生徒への臨床を通して—。異文化間教育, 20, 11-19.
- 黒木雅子 (1996) 異文化論への招待。大阪：朱雀書房。
- Lee, R. & Yoo, Hyung. (2004). Structure and Measurement of Ethnic Identity for Asian American College Students. *Journal of Counseling psychology*, 52, 263-269.
- Mollion, J. (1980). Construction of Black consciousness measure: Psychotherapeutic implications. *Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, 17, 458-462.
- Marcia, J. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 中根千枝 (1972) 適応の条件：日本的連続の思考。東京：講談社現代親書。
- 延島信也 (1963) 離人症症状を持つ一混血女子の精神療法的研究—特にnational identityとidentifications conflictの問題をめぐる—。

- 精神分析研究, 10, 5-19.
- Ong, A., Phinney, J., & Dennis, J. (2006). Competence under challenge: Exploring the protective influence of Parental support and ethnic identity in Latino college students. *Journal of Adolescence*, 29, 961-979.
- Phinney, J. (1989). Stage of ethnic identity development in minority group adolescents. *Journal of Early Adolescence*, 9, 34-49.
- Phinney, J. (1990). Ethnic Identity in Adolescents and Adults: Review of Research. *Psychological Bulletin*, 108, 499-514.
- Phinney, J. (1992). The Multigroup Ethnic Identity Measure: A new scale for Use With Diverse Groups. *Journal of Adolescent Research*, 7, 156-176.
- Phinney, J. S. & Goossens, L. (1996). Identity development in context. *Journal of adolescence*, 19, 401-403.
- Phinney, J. & Ong, A. (2007). Conceptualization and Measurement of Ethnic Identity: Current Status and Future Directions. *Journal of Counseling Psychology*, 54, 271-281.
- Poyrazli, S. (2003). Ethnic identity and psychosocial adjustment among international students. *Psychological Reports*, 92, 512-514.
- Rice, S., Ruiz, A., & Padilla, M. (1974). Person perception, self-identity, and ethnic group preference in Anglo, Black, and Chicano preschool and third-grade children. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 5, 100-108.
- Roberts, R., Phinney, J., Masse, L., Chen, L., Roberts, C., Romero, A. (1999). The Structure of ethnic identity of young adolescents from diverse ethnocultural groups. *Journal of Early Adolescence*, 19, 301-322.
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M., & Moore, S. M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 525-537.
- 白土悟 (2004) 異文化間カウンセリングの今日的課題。異文化間教育, 20, 4-10.
- 宗田直子・岡本祐子 (2005) アイデンティティの発達を捉える際の「個」と「関係性」の概念の検討: 「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み。青年心理学研究, 17, 27-42.
- 杉村和美 (1998) 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からの捉えなおし。発達心理学研究, 9, 45-55.
- 鈴木満・立見康彦・太田博昭 (共著編) (1997) 邦人海外渡航者の精神保健対策—欧州地域を中心とした活動の記録—。東京。信山社。
- 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 (共編) (1984) アイデンティティ研究の展望 I。京都: ナカニシヤ出版
- Taylor, M., Bassili, N., & Aboud, E. (1973). Dimensions of ethnic identity in late adolescents. *Dissertation Abstracts International*, 34(11-B), 5665.
- 上田宣子 (1977) 異国体験と日本人: 比較文化精神医学から。大阪: 創元社。
- 植松晃子 (2008) 異文化経験における民族アイデンティティの縦断的变化—日本人としての自分をどう意識するようになるのか—。日本心理臨床学会第27回発表論文集, 327.
- Weisskirch, S. (2005). Ethnicity and perception of being a “typical American” in relationship to ethnic identity development. *International Journal of International Relations*, 29, 355-366.
- 山本力 (1984) アイデンティティ理論との対話—Eriksonにおける同一性概念の展望—。鎌幹八郎・山本力・宮下一博 (共編) アイデンティティ研究の展望 I (pp.9-38) 京都: ナカニシヤ出版
- 山本里香 (1988) 女子学生の自我同一性に関する研究: 自我の二指向性の観点から。教育心理学研究, 36, 236-248.
- 山本雅美 (1995) 黒人とアイデンティティ。鎌幹八郎・宮下一博・岡本裕子 (共編) アイデンティティ研究の展望 III (pp.174-178) 京都: ナカニシヤ出版
- Yasui, M., Dorham, C., & Jishion, T. (2004). Ethnic identity and Psychological Adjustment: A validity Analysis for European American and African American Adolescents. *Journal of Adolescent Research*, 19, 807-825.
- Yip, T. & Fuligni, A. (2002). Daily Variation in Ethnic Identity, Ethnic Behaviors, and Psychological Well-Being among American Adolescents of Chinese Descent. *Child Development*, 73, 1557-1572.

## 付記

1. 本論文をまとめるに当たり、ご指導頂きました内田伸子先生（お茶の水女子大学）に深く感謝致します。また伊藤美奈子先生（慶應義塾大学）には貴重なご助言と励ましを頂きました。記して感謝の意を表します。
2. 本論文で引用した調査（植松, 2008）は、お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」（平成19年度）から研究助成を受けたものである。